
鏡の国戦記 ~ EPISODE SHAMAI ・ 3 ~ 『モンスーン』

亜玲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鏡の国戦記（EPISODE SHAMAI・3）『モンスーン』

【Nコード】

N2858D

【作者名】

亜玲

【あらすじ】

EPISODE MIRAIの4年前 ミラの隣国・エルナン王国で繰り広げられる、王子トナムと父王ラプオの物語。エルナン王家最大の秘密が暴かれる……

第1話

±第一話±

ミラ皇国の東　ヴァナーシャを渡り、台地に築かれた皇都を通り、深い森と高い山を越えたところに、その国はある。

山岳と大河の恩寵あつき国・エルナン

大デルタ地帯では豊富な食料が生産され、歴代の大王たちの善政により、小国ながらもその国力はミラに匹敵すると言われるこの国は、かつては世界1の桃源郷と謳われたと言っ……

2

「トンナム様、陛下がお呼びです」

自室の窓から、国土を南北に貫く大河・メンコン川を見下ろし、物思いに耽っていたトンナムの耳に、じいやの声が届いた。

「ああ、今いく」

聡いじいやに心中の憂鬱を悟られぬよう明るく発した声は、いささかわざとらしくかったかもしれない。

トンナム　本名ビオ・トンナムは、父王ラプオ5世が嫌いだった。

エルナン史上でも屈指の実力と讃えられる父。精悍な面立ちと筋骨隆々としたたくましい体は、まだ三十代という若さですでに王者の風格にあふれ、その卓越した知性は国民の生活を豊かにした。

だが、その目は決して、一人息子に向くことがない。

トンナムの母は、トンナムを産んですぐに亡くなったそうだ。それ以来、たった一人の家族となった父。

国政におわれ忙しいから、と周りの者は言う。

だがトンナムにはわかっていた。

父は確かに自分を嫌っている。

父にしてみれば、後妻もめとらぬ程愛していた妃の命を自分に奪われたようなものなのだ。しかたないのかもしれない……だが、何か

それ以上のモノがある気がする……

「よ！ トンナム」

暗澹とするトンナムと対照的な能天気な声が、王宮の廊下に響いた。

「チャプラー！」

声の主　どこかやる気なさげな表情をした青年は、一国の王子であるトンナムの数少ない友であり、専属の護衛であるチャプラー・オーヤだ。

この三十路手前の戦士は、若干10歳で近衛軍に入隊し、その類い稀な実力を認められて王子だった頃の父の護衛も務めていたツワモノである。

「うかない顔してどーしたよ……あ、当ててやるつか？ トンナムに呼ばれたんだろ？」

「当たり前。ったくやってらんねーよなあ……」

父の事を名前で呼ぶのも、チャプラの特権である。

「まあまあ、そーゆーなって！俺も一緒に行ってやるからさ！」

「まじでか？ 助かるぜ！」

少し元気を取り戻したトンナムは、チャプラとともに早足で父のもとへ向かった。

謁見の間。

「来たか、トンナム」

重厚な扉を押し開けると、さっそく父の抑揚にかけるバリトンが出迎えた。その顔には冷たい空気が貼りついている。

「父上、俺に用事ってなんですか？」

トンナムもまた、父に負けず劣らず冷たい声で尋ねる。さっさとここから立ち去りたくて、無意識のうちに早口になってしまふ。

国王に対するにはぶっきらぼうな息子の口調を気にするでもなく、王は淡々と話はじめた。

「今我が国がミラ皇国と戦っているのはお前も知っているな」

「はい、もちろん」

最近こそ大きな戦いはないが、依然両国の間では緊張状態が続いていた。

「数日のうちに、エルナン軍はミラ皇国皇都に奇襲をかける。そこでだ。お前に隊を一つ任せようと思つ」

「ええっ?!」

トンナムは思わず大声を出してしまった。父の信頼など得ていようはずもない自分を、そんな大事な戦いに赴かせてくれるなんて……

「まじですか父上?! どの部隊です? 皇都への突撃隊の一つですか?! 俺、俺、必ずやご期待に答えて見せます!」

初めて父に認められた……我知らず興奮するトンナムに、しかし、王は冷やかな視線とともに言い放った。

「いい気になるなよ、トンナム。誰がそんな部隊を任せると言った。お前に任せるのは、国境で後方支援を担当する部隊だ。要領の悪いお前の初陣にはもったいないくらいだ」

「なっ……!!」

高揚していた心に、亀裂が入る。

「おいトンナムニユ! 言いすぎだぜ?!」

先程から傍らで控えていたチャプラが、耐えかねたように叫んだ。

「いくらお前の訴えでも、聞き入れるわけにはいかん。……なんだ
トンナム、その目は」

(畜生……!!)

トンナムはありったけの憎しみをこめて父を睨み付けた。

「これは王の命令だぞ」

「……けっ……少しでも期待した俺が馬鹿だったよ!! どうせあんたは俺のことなんかどうだっていいんだもん!! 畜生っ!!」

「トンナム!!」

父の呼び掛けを黙殺して、トンナムは謁見の間を飛び出した。

……その時もう少しだけトンナムが冷静でいられたなら、彼は気付いたことだろう……父の目に走った痛ましげな光に……。

「続く」

第2話

±第二話±

「あゝあ、なーかせたー」

しんとした部屋に、チャプラの緊張感のない声が響く。

「ったく……トンマニユよお、心にもないこと言っちゃってね……
あとで宥める俺の身にもなってくれよな！」

9

軽いノリでそう言うと、チャプラは友の足元に腰をおろした。

「私は……父親失格だな……」

ラプオ5世 ビオ・トンマニユは、苦しげに呟くと、両手に顔を
埋めた。

その姿は、先程まであんなにも息子に冷たくあたっていた男と同一人物とは思えないほどだ。

「あの時、決意したはずなのに……」

「トンマニユ……」

完全無欠の大王として崇められる彼に唯一欠けていたもの……それは、嫡子だった。

代々一夫一婦制を重んじてきたエルナン王家。

王は、まだ子を産む前に病で妃を失ったのち、新たな妻をめぐるとはしなかった。

王家断絶の危機に、臣下達が必死で再婚を勧めるも、妃への愛情はあまりにも深く、新しく妻を迎えることなど思いもよらなかった

いや、もちろんそれもある。彼とて人の子だ。

しかし、それ以上にトンマニユが恐れたのは、内乱だった。

父・ラプオ4世は、悪王、と言うわけではなかった。

むしろ、彼のおかげでエルナンの平和の基礎が築かれた、と言っても過言ではない。

トンマニユの祖父の代まで、エルナン政界はひどく腐敗していた。

大小貴族による権力闘争が後を絶たず、無能な王が続いたおかげで国力は衰え、内外での断続的な戦は民の心身に深い疲弊を与えた。

そんな危機的状况を打破しようとしたのが、父だった。

彼はいわゆる恐怖政治で貴族を弾圧。軍の権威を高め、武力で国を統率した。

そのおかげで国はかなりまともな状態まで回復したのだが、その父も対ミラ戦で戦死。トンマニユは若干15歳で王位につくこととなった。

だが、その類い稀な才覚が幸いし、彼の政治によって、たった一年の間に国力はみごとに回復の兆しを見せ始め……

権力にとらわれぬ善良な貴族家系に生まれた妻がこの世を去ったのは、そんな最中だった。

妻の家系は、エルナンでも信頼の篤く実力もある貴族の一つで、彼女と結婚したことにより（実は恋愛結婚だったのだが）貴族たちは肅正されざるをえなくなっていた。

しかし、その妻が子も残さず亡くなったとなれば、たちまちのうちに貪欲な貴族たちは自分の娘を差し出すだろう。

拒もうが、迎え入れようが、王家はのっつけられてしまう……

しかし思案にくれていたある日、トンマニユのもとに神からの贈り物が届いた。

その日、夕方の散歩でメンコン川の川辺を散策していたトンマニユは、何やら籠のようなものが川面に浮かんでいるのを見つけた。自ら川に入り、籠のなかを確かめると、そこには一人の男の赤ちゃんが……

メンコン川は神聖な川。その川が男の子を自分のもとに届けてくれたのは、正に神の御意志だ

そう考えたトンマニユは、その男の子にトンナムと名付け、自分の息子にすることにしたのだった。

「なーに言ってるの。お前以上の父親なんていねーって！ あいつを後方部隊に回したのも、戦慣れしてないあいつを危険な場所にやりたくなかったただけだろうが！」

チャプラは、落ち込む王の膝をぽんぽんと叩いた。

トンナムの出自は、本人だけでなく国民にも秘密にされ、亡き王妃の忘れ形見、と言うことになっている。もちろん、貴族の台頭による内乱を防ぐためだ。

そして、トンマニユが息子に辛辣な態度をとる理由もそこにあった。年を重ねれば、いつか否が応でも隠された真実に気付くときが来るだろう。

「その時、もしお前があいつに優しくしていたら、あいつはお前に裏切られたと嘆くだろう……だから、敢えてお前はあいつに冷たくした。あいつが傷つかずにすむように……泣かせる話じゃねーの」

『チャプラ……私が息子を愛せない分、お前が愛してやってくれ』

友の悲痛な誓いを支えるため、チャプラはトンナムに無償の親愛をそそいできた。だがそれとて、心を鬼にしたこの父の愛情とは比べものにならないだろう。

「じゃあ、俺はかわいそうなトンナムを慰めてくれるか！　じ

や、あとでな！」

重たい空気を振り払うように能天気な声を出すと、チャプらはトンナムの後を追った。

「俺のことなんかどうだっていいんだもんな……か……」

一人玉座に座ったトンマニユは、息子の罵声を反芻した。

言われた瞬間、無性に虚しい気持ちになった。

どうだっていいはずがない。

愛していないはずがない。

何度抱き締めてやりたいと思ったことだろう。

何度共に過ごす時間が欲しいと思った？

たとえ血は繋がっていなくとも、たった一人の大切な

だが、淋しそうなトンナムの顔を見るたびに、本当にこれでいいのかと自問する。

自分はただ、国の安定のために息子を利用しているだけなのだ。

どんなにトンナムを大切に思っていようと。

どんなに彼の成長に、親としての喜びを覚えようと。

許されぬ

「トンナム……」

でも、もう、引き返すことはできない。

「続く」

第3話

±第三話±

トンナムが駆け込んだのは、王宮の裏手に続く寺院の中庭だった。

「あんのクソ親父!!!」

親近感を覚える顔立ちの神像に近付き、その巨大な足を蹴とばす。

「いつて!!!」

自分の足が痛くなっただけだった。

父の冷たい態度は、何も今に始まった事ではない。

なのに、今日はやたらと頭にくる。その怒りの矛先は父だけではない。

「なんであんなに期待しちまったんだ俺……」

部隊を任せる、といわれた瞬間、今までの確執も忘れて素直に喜んでしまった自分が、未だに信じられない。

父が自分を信頼することなどあろうはずもないのに……

トンナムだって、親としては嫌っていても、国王である父のことは尊敬していた。大王と讃えられる偉人を父に持ったことを、誇りに思う。そしてその息子である自分のことも……

さっきあんなにムカついたのはきつと、プライドを傷つけられたからに違いない。きつとそうだ……そうじゃなければどうして……

「そう落ち込むなって!」

この深刻さの欠けらもない声は。

「落ち込んでなんかねーよ、チャプラ……」

親友を安心させるには、トンナムの声は沈みすぎていた。

「あんな冷血漢、どーも思うわけねえだろ」

「またまたあ、そんなこと言っちゃって」

「にやつくチャプラ。なんだか全て見透かされているようで、無性にイラつく。」

「父上は、俺が前線に出て失敗するのが嫌だから……恥をかかされるのがいやだから、そんなどうでもいいような部隊に配属したんだ」

「お前……」

「もしもつとデキのいい息子がもう一人いたなら、きっと俺を一番危険なところに送ったんだろうけどな！」

「トンナムー!!」

いきなり、チャプラに肩を掴まれた。

「そう言う風に言うのはやめろ……いくらお前に冷たくあたってるところからって、息子を死なせたがるような男じゃねえだろがあいつは！」

「でも」

「後方部隊だって、戦争において重要なことに変わりはない。その部隊が国境にいてくれるから、前線のやつらは心置きなく戦えるんだ。それに、そこでガンバリゃあ、認めてもらえんだろ、きつと」

「チャプラ……」

確かに彼の言うことにも一理ある。
もしそこでの功績が認められれば……

「よし……そうと決まったら、戦に備えるぜ！ かならず功績をあげて、俺を見下したことを後悔させてやる！！」

基本的に物事を深刻に考えることのないトンナム。さっそく新たな目標に向けて意気込む。

「よっしゃ！ じゃあさっそく剣の稽古をつけてやる！」

「おう、頼む！」

意気揚揚と先を歩くトンナムの背を見つめ、チャプラはひそかにため息をついた。

トンナムは否定するだろうが、チャプラには分かる。

彼もまた、父を愛している……

トンマニユの決断が間違っていたとは思わない。

その証拠に、トンナムは父になんとか一矢報いようと言う妙な反骨精神もあいつて、強い少年に育った。

だが……

ときどき気付く。

それは、剣術の稽古のあと、新しい技を身につけたとき。

蹴球の御前試合で活躍したとき。

トンナムは、父の姿を目で追い、なにか言いたそうな素振りを見せる。

普通の親を持ったならきつと貰うであろう誉め言葉を、彼が父にも
らうことはない。

代わりにチャプラが誉めてやっても、嬉しそうな顔はするが、その笑顔の奥の一抹の淋しさは拭い去れない。

「やっぱり俺じゃあだめかもな……」

ひとりごちたチャプラの声は、季節風の音にかき消された。

「続く」

第4話

±第四話±

戦いの朝が、来た。

「これは昔私が使っていたものだ」

ラプオ5世が開けた箱の中には、軽装の鎧と大振りの剣が鈍い輝きを放っていた。

「これを……俺に？」

「そうだ。王子たるもの、優れた武具をまとわなければ示しがつかんからな」

今朝早くに父に呼び出されたトンナムとチャプラ。

ここ、鎧の間には、歴代の王達が使用した様々な武具が収められている。父もまた、それらに優るとも劣らぬ武具で、猛々しく身を固めていた。

「こりゃあ、トンマニユがまだガキのころに使ってた一級品だぜ！
やったな、トンナム！！」

箱を覗き込んだチャプラが歓声をあげる。

「父上の……」

確かに、知識の浅い自分の目から見ても、この武具はすばらしいものだった。

こんなすごい物を父が自分に与えるなんて……

「チャプラ、少し外してくれるか」

「え……」

父の言葉に、急にトンナムは不安を覚えた。大嫌いな父と二人きりになることは極力避けてきたのに……

しかしチャプラは思う所があったのか、すぐに頷いた。

「おう、分かった　じゃ、トンナム、犀舎サイの前で待ってるぜ！」

ウィンク一つ、投げてよこすと（へたくそだったが）、トンナムの訴えるような視線を黙殺したチャプラは鎧の間を後にした。

「……………着てみる」

相も変わらず抑揚に欠ける声。

だが、その言葉にトンナムは少なからず戸惑った。また何か説教の一つでも聞かされるのかと思っていた。

「……………あ、ああ」

言われるままに、鎧を身につけてみる。

今まで稽古用の簡易鎧はつけたことはあったが、本物は初めてだ。見た目に反するその重量に驚く。

「……………」

しかも金具が複雑でなかなか装着することができず、もたもたしてしまっ。

(父上が見てるのに……………)

すると、案の定、父が冷たいため息をついた。

「まったく……………鎧一つ着ることができんとはな。情けないにも程がある」

「くっ……………」

羞恥のあまりにトンナムが何も言えないでいると、突然、父が歩み寄ってきた。

その、男にしては綺麗で大きな手がトンナムに迫り……

「貸せ。私がつけてやる」

「……え？」

ぶたれると思って密かに歯を食い縛っていたトンナムは、間抜けな声をあげることになった。

あの父が、自分の鎧の着方をなおしている……？

「……」

特に何の感情も浮かべずに淡々と鎧の止め金をとめてゆく父王を、トンナムはまじまじと眺めた。

りりしい眉は、呆れのためなのか眉間に皺を刻ませ、眼光鋭い瞳は

黒々とした睫毛でその感情を押し隠している。

よく通った鼻筋。厚めだが形のよい、意志の強そうな唇。

今更ながらに、父の顔立ちが威厳と気品に溢れた精悍なものであると実感する。

だって、未だかつて、これほどまで父と近づいたことがあったろうか。

「今日の戦は、激しいものになるだろう。ミラ族は確かに自己愛者揃いの愚昧な民族だが、戦闘力はあなどれん」

最後に息子の背に剣を背負わせると、父はトンナムの目を正面から見つめた。

いつもは絶対零度の冷たさを湛えたその瞳に、今は戦闘前の緊張感が漲っている。

「我ら突攻隊が破られれば、お前達がこの国を死守することになる……まあ、そのような事はないだろうが、覚悟はしておけ」

「……はい」

珍しく冗舌な父を、トンナムは仰ぎ見た。

いつもはトンナムから話し掛けても大抵退けられるのに、どうした
というのか。

得体の知れない気分になったトンナムは、とりあえず姿勢を正した。

「じゃ、じゃあ、俺は出発します。……父上も、御武運を」

そして、足早に部屋を出ようとした

「……死ぬなよ」

「え？」

何か父が言った気がして振り向く。聞き間違いじゃなければ、父は今……

しかし、そこにもう父の姿はなかった。

「続く」

第5話

±第五話±

トンナムの任された部隊は、国境の山岳地帯に駐留することになっていた。

そこまでは、サイに乗って一時間もかからない。

「ビエービヅビエ〜 ビエアアアッビエー」

最近エルナンで流行している歌（アオザイのあなた：作詞作曲チヤンパーズ）を口ずさむトンナムを、チャプラが不思議そうに眺めた。

「何か良いことでもあったのかあ？」

「ビイイッビエ……っや、べ、別に……」

まるで自分が浮かれていることに初めて気付いたように、慌ててしかめっ面を試してみせるトンナム。

(ははあ〜ん、こりゃトンマニユとなんかあったな……わかりやすいヤツ)

普段からそんなにテンションが高いわけではないこの王子が、たまに陽気になるとしたらそれは、父と何かしら触れ合い(たいしたものでなくとも)があったときだ。

「俺はただ……う、初陣だから気が高ぶってるんだ!!」

(素直じゃねえ王子さまだねえ……)

まるで、父を好きになるのを、恐れているみたいだ。

宿営地であるトンクイン山のふもとに着くと、さっそくトンナム達はテントを張り、食料や治療道具を搬入した。

先程まであんなに晴れていた空は今、黒い雲に覆われている。

「一雨きそつだな」

季節風の影響で、この季節はやたらと雨が多い。

強くなってきた風に体を震わせると、トンナムは薬と包帯が入った壺を持ち上げた。

トンナムの的確な指示により、宿営の設置と荷物の搬入は順調に進んだ。

(実はこーゆー仕事向いてんのかな、俺……)

戦場で活躍できればなお喜ばしいのだが、こつこつ場面で部隊を指揮するのも悪くない。

もしかして、父はこのことを思ってここに配属してくれたのかもしれない。

朝の一件があつてから、トンナムはなんとなく浮かれていた。もちろん父を嫌いなことには変わりはないが……

(一人の戦士として、俺のことは見てくれたんだよな)

そうやって自分を納得させたトンナムは、壺を搬入しようとする近くのテントの入り口に近づいた。

「……でも、……トンナム様の……」

「……が……素晴らし……」

(ドン少尉と……レイ軍曹?)

テントの中で何やらひそひそと会話しているのは、この隊のリーダー格の二人だった。

しかもこれは、自分のことを誉めているのでは?!

(後でチャプラに自慢してやるわー!)

そう言う軽い気持ちで、トンナムはこっそりと聞き耳を立てた。

「でも、いくら不仲とはいえ、こんな部隊に配属するとは、陛下は
どう言ってお考えなんでしょうね？王子殿下の実力なら、前線に出て
も大丈夫なはずなのに」

「なんだお前、知らんのか？殿下と陛下のこと……」

「いや、仲がよろしくないのは知っていますが？」

「やはり知らんか……実は、これは絶対秘密なんだが……トンナム
様は、陛下の実のお子様ではないんだ」

その瞬間、まるで氷塊を飲み込んでしまったかのごとく、トンナム
の全身の血が凍った。

(……………え、今、なんて……………?)

「なんでも、亡き王妃に御子がいなくて困っていたところ、丁度ト
ンナム様がメンコン川に流されていたのを拾ったとかで」

ドン軍曹の説明は、派手な破砕音にさえぎられた。

「「?!」「」

何かの割れる音に驚きテントから顔を出した二人の目に、走り去る
トンナムの背中が見えた。

「しまったっ！ 王子殿下ああっ!!」

……背後から少尉の声が聞こえた気がしたが、そんなのどうでもい
い。

「はあっ、はあっ……」

「おい、トンナム?!」

トンナムは走った。途中で、兵の配備から戻ったチャプラにぶつかったが、それでも足を止めなかった。どこに向かうかも考えずに、ただひたすら走った。

「はあっ、はあっ……」

いつの間にかトンナムは、川辺に辿り着いていた。国境沿いに流れる、メンコン川の支流　トンナムの、生れ故郷。

「俺、は……」

呼吸が乱れ、頭の中は真っ白で、何も考えられない。

本当の息子ではない　　どうして今までその考えに至らなかったの
だろう。

あんなに冷たくされて、あんなに嫌い合って、それでもそんな事微
塵も考えなかった理由……今なら自分でもはっきり分かる。

本当は……

「トンナムっ!!」

息を切らして走ってきたのは、いつでも自分の傍にいてくれた男だ。
友、と思っていた。ついさっきまでは。

「チャプラ……お前、知ってたのか」

驚くほど冷たい声が出た。

「トンナム……その……」

暫らくためらった後、友と呼んだ男は静かに頷いた。

「そうか。じゃあ俺は、父上にも、お前にも裏切られたんだな」

「ち、違うんだトンナム、俺は」

「黙れっ！！ もう何も聞きたくない！！」

「話を聞いてくれ！」

「嫌だ！！」

急に熱いものがせりあがってきて、自分が泣いていることに気が付く。

「俺は！　どんなに冷たくされても父上が好きだったんだ！！　父上に認められなくて、だから耐えてきたんだ！　お前のことだ……なのに、なのに！！　何だよ！　俺はただ王朝を継ぐための

道具だったのかよ!!」

「それは違う!! トンマニユは……おい、トンナム、やめろ!!」

背後の川に飛び込もうとしていたトンナムの手を、慌ててチャプラが掴む。

「離せっ……?!」

この川が自分を運んできたというならば、この川に還るのも悪くない……そう思って振り向いた川の向こうに、何か人だかりが見えた気がして、トンナムは抵抗をやめた。

「……! トンナム、この話は後回しだ……戻るぞ!!」

メコン川の対岸には、完全武装した全身タイトスの集団がこちらに向けて歩きだしていた。

「続く」

第6話

±第六話±

ミラ平野

皇都の南東に広がる大平原は今や、皇国軍戦士の屍の海と化していた。

最初は意気込んで戦いに臨んだエルナンの兵士たちも、あまりにもあっけなく奇襲が成功したために、物足りない表情を浮かべている。

大王自ら率いる突攻隊は現在、皇都ポロッサに向けて進軍していた。

(……いつの間にか、あんなに成長していたのだな……)

サイに揺られながら、トンマニユは今朝の事を思い出していた。

結局自分は、意志の弱い男なのかもしれない。

愛する息子の初陣……危険は少ないとは言え、やはり心配だった。

それに、今回の奇襲がもし失敗したら、自分は命尽きるまで戦わねばならぬ。

そんな事を考えると今朝はいてもたってもいられず、息子を呼んだのだった。

（私が見ていなくとも、立派に育ってくれた……）

自分の代わりに息子に愛情を注いでくれた、あのお気楽な友には、感謝してもしたりない……

「陛下あああつー!」

息子の成長に思いを馳せていた王のもとに、早駆けの伝令が血相を変えてやってきた。

「どつした!」

敵は全て殲滅したはずだが？

「国境近くにミラ皇国の精鋭軍が潜伏! ……現在、王子殿下の部隊と交戦中です!」

「畜生っ! 数が多すぎるっ!」

全身タイツをまとめて三人切り飛ばしながら、チャプラは苦々しく叫んだ。

どうやら向こうにも、相当な切れ者がいるらしい。戦力の少ない所を狙って、国境を突破しようという作戦か……

「じゃあ、父上の隊を迎え撃ったのは……」

「ダメーだ！ あいつら、奇襲を完璧に読んでやがった……この銀の全身タイツ、ミラ皇国の精鋭軍だ！」

トンナム率いるこの部隊は、国境部隊の中でも一番戦力が少ない。背後に聳えるトンクイン山は、エルナン軍でさえも手を焼く難所だからだ。

そして、相手はよりもよって、そこを突いてきた。

「はあぁっ！…！」

全身ギンギラのミラ戦士が繰り出すナルスイ流剣術……初めて目の当たりにしてしまったトンナムは、必死で嘔吐感を堪えた。

「はあっ、はあっ……とぉっ…！」

なんとか剣を振るうが、激しい目眩に手元が狂う。

「ふはははっ！ どこを狙っている?!」

奇怪な角度に腰をねじ曲げた全身タイツは、ふらつくトンナムに容赦なく手刀を食らわせる。

「この美技を見るおおっ!!」

「がはっ!!」

なんとかかんとか攻撃を躲すも、陶醉しきった叫びとともに放たれた一撃が鳩尾にクリティカルヒット。血を吐きながら数メートルの距離を飛ばされる。

「トンナム!!」

「くっ……」

トンナムだけでなくチャプラも、そして数少ない戦士達もまた、満身創痍だった。

(俺たちは……負けるのか……？ 俺は、ここで死ぬのか……)

意識が朦朧とする。どうやら骨だけにととまらず、内臓までやられたようだ。

仮にこの部隊が破られたとしても、まだ国境部隊はあちこちに駐屯しているし、トンクイン山を越えられた所で、本国にも強力な部隊が残っている。それに、父の部隊が戻ってくれば……

(ああ、もう、父親じゃないんだ……)

「立て、トンナム！ 諦めるな!!」

チャプラの声を遠くにぼんやりと聞きながらも、トンナムはもう立ち上がる気力も体力もなかった。

「ジ・エンドかな？ んふっ」

なんとも形容しがたい笑顔をつかべたミラ戦士が、無駄に装飾の多い長剣を掲げながら近づいてくる。

(……………もう、疲れた……………)

自分は本当の王子ではないとわかった今、これ以上生きることになんの意味がある？

「死になさいいい!!」

「トンナムーッ!!」

音速で迫ってくる刃を、トンナムは静かな気持ちで眺めた。

これでいい。これで楽になれる。

『……死ぬなよ』

最期に思い出したのは、今朝の父の言葉。

父よ。

何故あんなことを言ったのか。

あんたのせいで、俺はこんなにも苦しい

「トンナム……!」

ズブリ、と、鉄が肉を抉る音が聞こえた。

「なっ……」

顔にあたった雨の冷たさに驚き、目を開けたトンナムの前に、一人の男が背を向けている。

見慣れた背中。

憧れ続けた背中。

そして、追い付くことが叶わなかった背中。

その背から突き出る、自分を貫くはずだった刃。

「ち……父上ええっ！！！」

トンナムを庇って胸を刺し貫かれていたのは、ラプオ5世
きな、父だった。 大好

「続く」

第7話

±第七話±

「くはっ……！」

父が膝をつくと同時に、対峙していた全身タイツも地に倒れ伏した。

こちらは完璧に絶命している。その左胸には、父の愛用の短剣が深々と突き刺さっていた。

53

「……無事か、トンナム……」

「あ……あ……」

父の体を抱き起こしたトンナムは、その冷たさにぞっとした。

雨が降りしきる戦場は、舞い戻ってきた突攻隊の助力によって、ほぼミラ軍を制圧しつつあった。

「なんで……なんで、俺のことなんか……」

荒い息をつく父の顔を凝視しながら、トンナムは震える声を絞りだした。逞しい胸から流れ出る血が膝を濡らす。

血が止まらない

「どうしてだよ……俺のこと、嫌ってたんだろ……本当の子供じゃない、から……なのに……」

「……知ったのか……」

「俺なんか、ただ、後継ぎのための道具……なんだろ……だから」

「トンナムっ！」

胸に、刃を突き立てたままの父が、必死に血塗れの体を起こし、

トンナムは、生まれて初めて、父に抱き締められた。

「……すまなかった……今まで16年間……お前に、辛い日々を……送らせて……」

「父上」

「確か、に……それも……あつた……それは、いいわけ……できぬ……だが、お前を、授かった時……お前の、成長を見たとき……私は純粹に、父親として……本当に嬉しかった……」

「っ……喋るなよおっ……！」

父が言葉を発する度に、その口から、傷口から血が零れる。

だが父は、何か言い残す事を恐れるように、擦れた声で語るのをやめない。

「いつか……この日が来た時のために……お前が傷つかぬように……
私は、お前を……愛さぬよう……冷たくあたり続けた……」

「……え……？」

「だが、それは……間違いであったのだな……結局は、こんなにも……
お前を傷つけて……私は……」

トンナムは、わが耳を疑った。

散々嫌い合ってきた今になって、何故そんな事を言う？

失血がひどくて朦朧としているのかも知れない。

最期まで嘘をついて、なんとか王朝を継いでほしいのかもしれない。

でも、じゃあ、この手はなんだ。

ゆっくりと伸ばされた父の手が、息子の頬を包む。

冷たくなっていく体に反して、ひどく暖かい手だった。

「父上」

「私が憎いかトンナム……憎いだろうな……だが……例え血が繋がっていなくとも、愛している……私がいなくとも、お前ならば……」

その言葉を聞いた瞬間、トンナムは父にしがみついていた。

「嫌だ！！ 逝くなよっ……逝かないでくれよっ……！！ 俺だっ
て、俺だって、父上のことが好きだったんだ……」

「トンナム……」

父の笑顔が自分に向けられるなど、これが最初で最後かもしれない。

「父上……」

「泣くな……お前は……エルナンの王子なのだから……我が……息
子……よ……」

「父上……？」

「父上……」

「……………」

ゆっくりと倒れた父の体を抱き、トンナムは声にならない叫びをあげた。

それは、16年間すれ違い続けた思いが溢れだした、叫びだった。

「続く」

第8話

†第八話†

「だ……新たな敵だあっ!!」

一人の兵士の叫び声に、エルナンの戦士たちがミラ軍の残党から目を移す。

「……しまった……シャマイだ！ シャマイの戦士だ!!」

「なんてこった！ こちらに残った戦力はもう……」

遙か遠くから進んでくるシャマイの騎牛がたてる足音に、はやくも大地が振動する。

混乱の中、チャプラがトンナムのもとに駆けしてきた。

「トンナム！ 大丈夫か……っ？！」

「チャプラ……父上が……父上が……っ！！」

「っ、トンマニユ……！」

痛みと涙に擦れた声を聞き、チャプラが血相を変えて王の脈をとった。

「……！！ 微かだがまだ脈はある！」

「じゃあ、速く……速く手当てしなきゃ、父上が死んじゃまっつ！！」

しかし、すぐそこには、ミラ王国最強民族・シャマイの部隊が迫っている

絶望に曇った目が、近づいてくる

「それ」を捉えた瞬間、トンナムは神の奇跡に心から感謝した。

「……………あれは……………」

先陣を切って駆けてくる騎牛兵の掲げる旗　　白地に交差した槍が
赤く染め抜かれたあの旗は……………

「チャプラ……………あれは……………あれは俺たちの援軍だ！！　あの戦士、
友情旗を掲げてる！！」

「ほ、本当か?!」

シヤマイの友情旗は、誇り高き草原の貴族として知られるモランたち
が、何らかの理由で敵軍と手を結ぶときに掲げる旗だ。

「エルナン・ミラ両国の戦士に告ぐ!!」

友情旗を持った騎牛兵が、勇ましい声をあげながら戦場へ突っ込んできた。

「我の名はアツタカ・マウア!! 我らシャマイの長の言葉を告げる者だ!!」

アツタカと名乗った少年は、友情旗を掲げて大音声をあげた。

「エルナンの勇猛な戦士に正面から立ち向かわず、あまつさえ兵の少ない部隊に精鋭を送り込んだその所業、我らのモラン道に反する許しがたい行い!! よって我らシャマイはこれよりエルナン軍を援護する!! 全軍、突撃イイイイっ!!」

「ウホホオオオオウツツ!!」

アッタカの号令とともに、シャマイの戦士たちが雄叫びをあげながら突進してきた。

「「「「いやああああんんん！！！！」「」「」

これには、さしもの精鋭ナルシー達も一溜まりもない。妙に艶っぽい叫びをあげながら、蜘蛛の子を散らしたように逃げ惑い始める。

「いよっしやあっ！！ 形勢逆転だぜ！！」

チャプラは派手なガッツポーズをキメると、血糊で輝きの鈍くなった剣を自分の服で拭った。

「トンナム、トンマニユを安全な場所に！！ 俺は生き残りを指揮する！！！」

「あ、ああ、わかった！！」

もはや虫の息になっている父の長身を、渾身の力で担ぎあげる。

「必ず助ける!!」

しかし、トンナムもまた体中に重傷を負っていた。

「くっ……!!」

膝が折れそうになるのを、歯を食い縛って持ちこたえる。

(今襲われたら、終わりだ……)

必死に父の体を担ぐトンナム。

その時、一頭の闘牛がこちらに駆けしてきた。牛上には、気の強そうなショートカットの美少女が乗っている。

「あ！ あなたは……！！！」

双頭のサイ トンナムの鎧に彫られたエルナン王家の紋章に視線を注いだ少女は、闘牛の足をはやめた。

「殿下！！ トンナム王子殿下！！！」

「え?!！」

いきなり自分の名を呼ばれ驚くトンナムの前に、少女が牛からひらりと舞い降りた。

「初めまして……なんて言ってる場合じゃないよね。そちらは国王陛下よね?! わっ、ひどい怪我!!！」

「あなたは……?」

少女の深紅の装いは、シャマイのモランのものだ。つまり、自分達の味方

(でも、こいつらも俺たちエルナンの敵に変わりはない……)

青ざめた顔で父の様子を診る少女から、トンナムは少し距離を置いた。

「シヤマイ……まずあなたの名を名乗れ」

「え、あ、私？ 私はマナ。マナ・アグスだよ。それより、はやく陛下を安全なところにお連れしなきゃ！ 殿下だってかなりやられて……」

マナ、と名乗る少女が伸ばした手を避けるように、トンナムはあわずさった。

「寄るなっ……あなた、何を企んでんだ?!」

シヤマイ軍内部についての情報は、あまりトンナムの耳には入っていない。

誇り高き戦闘民族であることは知っている。友情旗のことも 現に今だって、敵であるはずの自分たちを助けてくれている。

だが、なぜそんな戦場に女がいる?!

エルナン軍には女性はいない。

それは、昔の王が、女が女であることを利用するような卑怯な戦略を嫌ったからだ。

戦場に女があらわれれば、誰もが油断する

「なっ……なにバカなことやってんのよ！ それどころじゃないでしょ?!」

しかしマナは眉を釣り上げてそう言つと、ラプオのもう片方の肩を担ぎ、牛に乗せようとした。

(この女っ……初対面のしかも一応王子に向かってバカだと?!)

少女のあまりの言い様に後退りも忘れたトンナムの耳元で、声が弾けた。

「見つけたよ」

「なっ?！」

マナと言い合っていたわずかな時間の中に、ミラ戦士が音もなく背後に近寄ってきていたのだ!

(しまった! 父上 ！！)

親子もろとも死を覚悟したトンナム……しかし。

「下がって殿下!！」

凜とした声に従えば、風のような勢いでマナがトンナムの前に飛び出し、

「はっ!！」

「つつ！……！」

華麗な三段突きに、ミラ戦士が体勢を崩す！

「ま、マナ……！」

その体捌きはなかなかのもので、彼女が鍛練を積んできていることが瞬時に理解できた。

「殿下！ シヤマイ村には、凄腕の医術師がいるんだ……！ きっと陛下の傷もなおせる……！」

ミラ戦士とつばぜり合いながら、マナが叫ぶ。

「シヤマイは誇り高い民族だよ！ だからお願い、私を……私らを信じて……！」

「マナ……！」

「くっ……」

細い腕で、華奢な体で、どれほど厳しい鍛練を積んだのだろう。

戦士にならずとも、普通の女として生きる道だってあったはずなのに。

本来敵であるはずの自分達親子を救うために

「きゃっほおおお……」

マナの言葉に心揺さ振られるトンナムの耳に、また違う声が飛び込んできた。

「マナ！ そいつは俺に任せちゃってよきゃっふううう……」

「ヨウタさん……」

ヨウタ、と呼ばれた満面笑顔のモランは、牛から飛び降りると、見たこともないような型の体術でミラ戦士を圧倒しはじめた。

「さ、殿下、今のうちに!!」

誇りと勇氣に満ちたマナの笑顔が、先程父の浮かべた笑顔と重なった。

「……わかった、頼む!!」

トンナムはマナと力をあわせてマナの牛に父の体を乗せ、ヨウタが乗り捨てた牛に自らまたがり、

「飛ばすよ!!」

「おっ!!」

風のように戦場をあとにした

「続く」

最終話

±最終話±

土の月。

長かった雨季が終わり、秋のエルナンは、もう少しで乾期を迎えようとしていた。

「ビウエエ〜ッビアエエービエビエイイビイ〜」

最近えつなんで流行している歌（インディカ水田でつかまえて：作詞作曲チャンパーズ）を口ずさみながら、トンナムは王宮の廊下を歩いている。

「よ！ トンナム」

「ビエエエエエッ！〜 ビウエイエービッ……チャプラ！」

能天気な声でトンナムの歌を遮ったのは、トンナムの良き友であり、専属の護衛であるチャプラ・オーヤだ。

「ノリノリで歌っちゃって、どーしたよ？ あ、当ててやるうか？
トンマニユに呼ばれたんだろ??」

「当たり前。」

嬉しそうな顔で答えたトンナムは、友人とともに謁見の間に歩み入る。

「来たか、トンナム」

重厚な扉を押し開けると、最近やっと抑揚の出てきた深い声が出迎えた。

その顔に浮かんだ不器用なほほ笑みに、トンナムもまた笑み返した。

「おはよう、父上」

……あの戦いののち、シャマイの名医術師アッスマ・マウアの懸命の治療によって、奇跡的にもラプオ5世は一命をとりとめた。

国境の戦いは、シャマイ・エルナン連合軍の大勝利に終わり、その二日後には傷ついた王の代理としてトンナムが、シャマイ・エルナン友好条約を締結させたのだった。

「いよいよ出立だな」

「ああ」

「少しの間お前の顔が見れぬと思うと、淋しくなる」

「父上……」

今日は、トンナムがシャマイ村に旅立つ日

父の傷が完治するまでの間、二人はマナの家滞りさせてもらっていた。

初めて過ごした父子水入らずの時間は、トンナムのこれまでの人生で一番楽しい時間だった。

今まですれ違い続けた年月を埋めるように、二人は色々な話を話した。

特に蹴球の話になると、興奮した口調で話すトンナムを見て父は、「今度は私もやってみようか」と笑った。

そんな貴重な時間を与えてくれたシャマイの優しさに触れたトンナムは、恩返しのため、そして王子として見聞を広めるために、シャマイに留学することを決意したのだった。

「トンナム……せっかくの機会だ。多くを学び、成長して帰ってこい」

「ああ、わかってる」

トンナムは、父の長身を仰ぎ見た。

かつては冷たく厳しい光を宿していた双眸には今、穏やかな優しさが揺蕩っている。

「……じゃあ、行ってくる」

これ以上長引かせても、別れ辛くなるだけだ。それに何も、今生の別れではない。今の自分には……

左胸に拳をあてて跪く、エルナン特有の挨拶をすませると、トンナムは父に背を向けて歩きだす

「帰ってきたら、ともに蹴球をしよう」

「え？」

振り向くと、少し照れたような父の顔。

「おう、約束だな！」

そう、今の自分には、帰りを待っていてくれる、大切な「家族」がいる

開け放った扉の向こうから吹いた季節風が、微かな蓮の花の薫りとともに、父子の髪を揺らした。

「終」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2858d/>

鏡の国戦記～EPISODE SHAMAI・3～『モンスーン』

2010年10月10日00時56分発行